

本日ここに、洋野町長水上信宏様を始め、多くのご来賓ご臨席のもと、平成二十七年度卒業式を挙行できますことに心から感謝申し上げます。

ただいま卒業証書を授与された普通科六十五名、海洋開発科二十三名の皆さん、卒業おめでとう。また、ここまで子どもたちを慈しみ育て、この日を心待ちにしてこられた保護者の皆様にも心よりお祝い申し上げます。

思い起こせば、震災津波の記憶がまだ鮮やかに残る三年前、皆さんは種市高校に入学してきました。皆さんの高校生活は復興の歩みとともにあったとも言えます。と同時にこの三年間は種市高校をアピールする歳月でもありました。皆さんの入学と時を同じくしてNHKの連続テレビ小説「あまちゃん」が放送を開始し、ドラマの舞台となった本校は、放送終了後も、北三陸と称されたこの地の自然と南部もぐりの伝統を全国に発信し続けることとなったわけですから。皆さんの三年間はこれらのことと切っても切れないものとして思い出されることでしょう。

さて、皆さんの門出にあたり、二つのことについてお話しして私からの饒の言葉にしたいと思います。

一つ目は、「なんのために生きるのか」ということについてです。もちろんこれは人それぞれであり、皆さん自身が考えることです。ただ、昨年ノーベル生理学医学賞を受賞した大村智博士がおっしゃった次の言葉は大いに参考になるでしょう。「どちらが世の中、人のためになるか。分かれ道に立ったときはこれを基準としてきた」。かつて偏った全体主義が戦争を招いたという苦い経験があつて、私たちは「自分を大切にすること、個人を尊重すること」を第一義として教えられてきました。しかし物質的に豊かになり、人々の欲求が飽和状態になった今、「自分のためにだけ生きることと突き当たる限界」というものを現代人は感じているのではないのでしょうか。「自分のため」より「世のため、人のため」大村博士は幼い頃からずっとおばあさまにそう教え続けられたのだといっています。このことは、宮沢賢治が『農民芸術概論』の中で述べている「世界が全体幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という言葉に通ずるものに違いありません。無論個人は尊重されるべきですが、皆さんには「世界のために自分に与えられた使命は何か」ということを考え続けて日々を過ごしてほしいと思います。

二つ目は、「どのような態度で生きるのか」ということについてです。私が皆さんに持ち続けてもらいたいと考えてるのが、「感謝の気持ち」と「謙虚な姿勢」です。人は一人では生きていけません。まして震災以来、人と人との「絆」の大切さが叫ばれてきました。その根幹として、まず自分を生かしてくれている周囲への感謝の気持ちが大仕事だと考えます。今日は皆さんが祝福される日ではありますが、それと同時に、皆さんを支えてきてくれた、地域の方々、小学校時代からの恩師、友人、そして誰よりも家族に對して、感謝の気持ちを伝えるべき日であると思います。感謝することによって、日々積み重なり更新されていく自分自身の歴史の輪郭がはつきりとしていくのです。そして、これから皆さんが人と接するときに忘れてならないのが謙虚な姿勢でありましょう。人には誰しも自分の意見を通したいという欲求があります。もちろん欲求を持つこと自体は悪いことではない、むしろ強い意欲というものは絶対必要です。しかし自分自身を成長させたいと望むなら、己を

虚しゆうして、素直に人の話を聴く姿勢が非常に大切になります。謙虚な姿勢で他者の声に耳を傾けることで、曖昧模糊とした自分の未来に道筋が見えてくるのです。更にいえば、謙虚な姿勢というものは、年齢を重ね、人を指導する立場に立つと益々大事になってきます。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という日本のことわざは、私たちが生きていく上での偉大な知恵を表していると言えましょう。

以上、「なんのために、そしてどのように生きるのか」ということについてお話ししましたが、是非皆さんには考え続けてほしいと思います。

卒業生の皆さんがこれから歩む道はそれぞれですが、この種市高校で過ごした日々を誇りに思っ、て人生を送っていただきたい。最後に、皆さんの未来が輝かしいものとなるよう祈念して式辞といたします。

平成二十八年三月一日

岩手県立種市高等学校

校長 南館秀昭